

南海トラフ地震への備え －被災地からの提言－

座長 吉野 能[†] 近藤久禎^{*}第73回国立病院総合医学会
(2019年11月8日 於 名古屋)

IRYO Vol. 75 No. 3 (251–252) 2021

要旨

国立病院機構は、広域災害時の専門的な医療提供、実践の中核施設である「災害医療センター」を中心に、DMAT (Disaster Medical Assistance Team) から構成される初動災害派遣医療チームや、慢性回復期の支援も可能な機構医療班を組織、展開できる全国の多くの施設から構成されている。よって、学術集会では災害医療は重要なテーマとなり、多くの施設から発表、情報提供があり、活発な討議がなされる。第73回国立病院総合医学会ではシンポジウム、教育講演、ポスター発表に災害医療関連のテーマを盛り込み、近年経験した災害医療の実際と、予測されている南海トラフ地震への対策に関する大変有意義な情報収集、情報交換の機会となった。本稿ではその中からシンポジウムの内容の要約、発表者の寄稿論文を紹介する。

キーワード 災害医療、南海トラフ地震

2019年11月8日、9日の両日、第73回国立病院総合医学会が名古屋国際会議場において開催され、初日のプログラムの企画として「南海トラフ地震への備え－被災地からの提言－」と題したシンポジウムが行われた。

会場となった名古屋国際会議場は熱田神宮の門前町近くにあり、かつては東海道41番目の宿場であった「宮」の宿から次の宿場である「桑名」までの海路（七里の渡し）となっていたところである。1989年に開催された世界デザイン博覧会の会場として整備されるまでは貯木場であり、1959年の伊勢湾台風で甚大な被害が出た場所でもある。このように災害と縁のある会場で、南海トラフ地震に対する備えと題して、近年さまざまな被災を経験した施設から災害対策に尽力されている3名の講師を迎えて講演を

いただき、会場の参加とともに有意義な議論が展開された。

講演の1席目は「SY 1-1 熊本地震から学んだこと」と題し、熊本医療センター高橋毅先生から、2016年4月14日に発生した熊本地震の被災状況と、当時展開された災害医療、そこから得た教訓について発表していただいた。普段の訓練は厳しい状況を想定して行うことが重要であること、ライフラインは上水と井戸、都市ガスとプロパンガス、供給電力と自家発電といったそれぞれ2種類を常備しBCP（事業継続計画）に盛り込むこと、災害医療においては職員も被災者であり、休みを考慮した2セットのローテーションを組む必要があることなどの提言をいただいた。また、南海トラフ地震の想定域内の国立病院機構の所在地を地図で視覚化し、浸水予想

国立病院機構名古屋医療センター 泌尿器科 災害対策室、
著者連絡先：吉野 能 国立病院機構名古屋医療センター
〒460-0001 愛知県名古屋市中区三の丸4-1-1

e-mail: yoshino@med.nagoya-u.ac.jp

(2020年10月1日受付, 2020年11月13日受理)

Preparations for Nankai Trough Earthquake: Recommendations from the Disaster Area

Chairpersons: Yasushi Yoshino and Hisayoshi Kondo, NHO Nagoya Medical Center, *NHO Disaster Medical Center
(Received Oct. 1, 2020, Accepted Nov. 13, 2020)

Key Words: disaster medicine, Nankai Trough Earthquake

*国立病院機構災害医療センター 災害医療部 †医師
泌尿器科・災害対策室長